

## 初めて特別支援教育について学んだ教育学部1年生の印象

### ～講義後の感想レポートの自由記述分析を通して～

西川 崇（長崎大学大学院教育学研究科）

#### はじめに

特別支援教育は、「障害のある幼児児童生徒の自立や社会参加に向けた主体的な取組を支援するという視点に立ち、幼児児童生徒一人一人の教育的ニーズを把握し、その持てる力を高め、生活や学習上の困難を改善又は克服するため、適切な指導及び必要な支援を行うもの」（文部科学省）である。平成19年4月から、「特別支援教育」が学校教育法に位置づけられ、すべての学校において、障害のある幼児児童生徒の支援をしていくことが明確になり8年目に入る。通常学級の教員も障害について理解し、児童生徒への支援をしていくことが求められている。

本学部においては、特別支援教育に関わる内容として「障害児教育論」「ボランティア論」を必修とし、介護等体験実習（附属特別支援学校4日間、県内施設等3日間）を必ず受講することとしている。

筆者は、教育学部の新入生約250名を対象とするモジュール科目「教職の理解」において、「特別支援教育の考え方・進め方」の講義を担った。これは、学生にとっては、特別支援教育や発達障害の概念について触れる初めての機会である。これまで小・中・高等学校の児童生徒として学ぶ側であった学生が、教職を目指し、指導・支援する立場として、特別支援教育についてどのように感じ、どのように受け止めたかを把握することは、これからの教育の担い手となるであろう学生に、特別支援教育についての正しい理解と知識を段階的に指導していく上で大切な視点であると考えた。

関連する先行研究としては、特別支援学校教員養成課程の学生に「特別支援教育に関する学びのニーズ」を調査した船橋の研究(2014)、教育学部初年度入学生の「特別支援教育に関する学習の希望」「特別支援教育に関する基本用語54語の認知度」などを調査した見上・猪狩・相澤の研究(2013)、教育学部学生の「発達障害のイメージ」を質問紙により分析した菊池の研究(2011)などがあるが、本研究では、教育学部1年生を対象にし、特別支援教育についての初めての講義についての感想から学生の印象に残ったことに焦点を当てて分析するものである。併せて学部教育で押さえるべき特別支援教育の内容・方法についても検討したい。

なお、本稿は筆者が担当した講義のみを対象に検討するものであり、講義「教職の理解」についての全体的な分析を行うものではない。

## 1 講義の概要について

### ① 講義「教職の理解」

本講義は、教育学部 1 年生対象の教養教育の学部モジュール科目として設定されている教職の必修科目であり、教育学部に入学した全学生を対象にした教職についての入門的な講義である。3 名の専任教員と各附属学校園長が、テーマに即して講義演習を行うものである。平成 26 年度の履修登録者は小学校教育コース、中学校教育コース、幼稚園教育コース、特別支援教育コースの 1 年次生全員と、教職大学院に在籍して 1 種免許状を取得希望の院生 3 名を含んで 249 名であった。本講義のシラバスは、表 1 のとおりである。

表 1 平成 26 年度前期「教職の理解」シラバス（抜粋：太字は筆者担当分）

回・期日	授業内容
1(4/ 8)	イントロダクション（授業の趣旨・概要の説明）
2(4/15)	現代の子どもの実態
3(4/22)	専門職としての教師
4(5/13)	組織としての学校
5(5/20)	公務員としての教師
6(5/27)	シリーズ 学校経営の実際（附属中学校の取組）
7(6/ 3)	シリーズ 学校経営の実際（附属特別支援学校の取組）
8(6/10)	シリーズ 学校経営の実際（附属幼稚園の取組）
9(6/17)	シリーズ 学校経営の実際（附属小学校の取組）
10(6/24)	シリーズ 学校経営の実際（教育行政の取組）
11(7/ 1)	シリーズ 教育活動を考える（家庭教育の視点から）
12(7/8)	<b>シリーズ 教育活動を考える（子ども理解の視点から）</b>
13(7/22)	<b>シリーズ 新しい教育課題（特別支援教育の考え方進め方）</b>
14(7/23)	シリーズ 新しい教育課題（体験活動の考え方進め方）
15(7/29)	先生になろう（模擬授業・場面指導のロールプレイング）

受講者は、8 回目に附属特別支援学校の校長より、特別支援学校の教育の実際についての講義を受けている。ここでは主として知的障害のある子どもの教育についての内容が扱われた。筆者は、12 回目「シリーズ教育活動を考える（子ども理解の視点から）」と 13 回目「シリーズ新しい教育課題（特別支援教育の考え方・進め方）」を担当しており、12 回目は、主として生徒指導の視点から、子どもの問題行動とそれらを理解する視点について解説した。13 回目の講義「特別支援教育の考え方・進め方」では、特別支援教育の意義、特別支援教育の対象になる子どもたちについて、その状態像や指導法を紹介しながら解説した。

### ② 講義内容「ちょっと気になる子どもたち 特別支援教育の考え方・進め方」

講義では、特別支援教育の概念と対象を示したあと、教室にいる「ちょっと気

になる子ども」という視点で話をした。「発達障害」という言葉や「LD」「ADHD」「高機能自閉症」という診断名を多用したり、この診断名の子どもはこのような特性、このような対応というような説明は控え、「学び方に特徴がある子どもたち」「障害の理解よりも特性の理解」ということをキーワードにして、学習上または生活上の困難を抱えている児童生徒の様子や、それらに応じた教材や支援の例について解説した。初めて特別支援教育という概念に触れるに際し、発達障害に対するポジティブなイメージや、どの学級にも身近にいるのだという認識をもってほしいと考えたからである。

なお、講義資料には、国立特別支援教育総合研究所 Web サイトの「特別支援教育研修講座 基礎編」を一部引用し、学習上または生活上の困難を抱えている子どもの具体的なイメージをもたせるために、京都教育大学作製「発達障害に関する専門性向上ガイド」（DVD）のロールプレイ映像を用いた。

講義の終末に感想レポートを書く時間を 10 分程度設けた。その際、タブレット PC 等で調べるのではなく、講義資料の参照は可とし、講義の感想、印象に残ったこと等を自分の言葉で書くように指示した。

## 2 研究の方法

### ① 分析の対象

「特別支援教育」や「発達障害」について初めて触れる学生を対象とするため、受講登録者 249 名のうち教職大学院生 3 名を除く教育学部学生 246 名を調査対象とした。そして、本講義に出席した 228 名分の感想レポートを分析の対象とした。なお、教職大学院生を除いた受講登録者の内訳を表 2 に示す。

表 2 受講登録者の内訳 (n=246)

コース	人数	性別	教員志望	(%)
小学校教育コース	126	男 67	望んでいる	94.6
中学校教育コース	74	女 179	望んでいない	5.4
幼稚園教育コース	30			
特別支援教育コース	16		—	

(入学者調査による)

### ② 分析の方法

感想レポートに目を通し、段落ごとに書かれている内容から抽出されたキーワードを分類統合し、学生が感じた感想を整理、分析する。自由記述であるため、複数のキーワードが入っている場合は、それぞれにカウントする。なお、本人の感じたことが記載されていないものや、配布した講義資料からの引用が大半を占める段落については、キーワードが入っていても、カウントからは除外した。

## 3 結果

感想文から整理統合されたキーワード・内容の実数を表4に示した。また、抽出されたキーワードを整理統合し、項目ごとに学生の記述を抜粋したものを表5に示した。これらの内容から、学生が本講義を受講して、特別支援教育や発達障害の子どもへの支援についてどのような意識・印象をもったかを見ていきたい。

**表4 感想文から整理統合されたキーワード(n=228)**

感想文に書かれたキーワード	人数 (%)
「特性の理解」が大切だと思った	81 (35.5)
子どもに合わせた指導が大切だと思った	75 (32.9)
自分の身近にもいたと思った	71 (31.1)
もっと特支の勉強をしたい、免許を取得したい	49 (21.5)
個性、よいところを伸ばしたい	45 (19.7)
動画で見たような対応はよくないと思った	37 (16.2)
正しく理解、対応をして二次障害を防ぎたい	36 (15.8)
根性論ではだめだと言うことが印象に残った	33 (14.5)
「放置しない」ことが大切だと思った	30 (13.2)
教師の対応の仕方ewith変わると思った	30 (13.2)
支え合う、共に生きる学級にしたい	29 (12.7)
自分に指導ができるか、不安になった	24 (10.5)
子どもが過ごしやすい環境作りをしたい	20 ( 8.8)
頭ごなしに叱ることはよくないと思った	13 ( 5.7)
ちょっとしたサインに気付く教師になりたい	11 ( 4.8)
楽しめる、分かりやすい授業づくりをしたい	11 ( 4.8)
子どもの気持ちや立場に立って理解したい	11 ( 4.8)
実際に子どもと関わって、理解したい	10 ( 4.4)
特別支援教育は自分には関係ないと思っていた	9 ( 3.9)
自分にも当てはまるところがあると思った	8 ( 3.5)
特別扱いになるのではないかと思った	7 ( 3.1)
早く気付く、早期対応が必要だと思った	5 ( 2.2)

※感想文の段落ごとにカウントした。一つの文章に複数のキーワード、意味合いが含まれているときは、複数のキーワードでそれぞれカウントした。

#### (1) 感想レポートに頻出したキーワードについて

感想用紙は B5 サイズ横書きであり、学生により 4～2 程度の段落数で、講義内容で印象に残ったこと、学んだこと、講義を聴いて考えたことが書かれていた。

表4に見るように、「子どもの特性の理解が大切である」というキーワードに整理・統合された感想を書いた学生が 81 名 (35.5%) であった。筆者が講義の中で強調し、「障害の理解よりも、その子どもの特性の理解が大切」としたスライドが印象に残ったものと思われる。

次いで、「その子どもに合わせた指導が大切であると思った」が 72 名 (35.5%) であった。「その子の特性に気付き、それに応じた指導をしたい」「その子に応じて柔軟な対応をしたい」というものである。

そして「自分の身近にもいたと思う」が 71 名 (31.1%) であった。DVD によるロールプレイング映像を流したことにより、机の中が整理できていない子ども、文字を上手に書けない子ども、すぐにキレる子ども、対人関係がうまくとれない子どもなどが、自分の学校時代をイメージしたときに、同級生、部活、現在関わっている学校や学習塾などにもいる、いたというものである。さらに、「もっと特別支援教育の勉強をしたい、特別支援学校の教員免許を取得したい」49 名 (21.5%)、「子どもの個性、よいところを伸ばしたい」45 名 (19.7%) と続く。

## (2) 整理・統合されたキーワードのカテゴリー化による分析

自由記述の感想には、同一文章の中にも複数のキーワードが含まれているものもあり、またそれぞれに関連性もあるためカテゴリー化しにくい面もあるが、整理・統合されたキーワードをグルーピングすることで、学生が印象に残った事象のカテゴリー化を試みた。

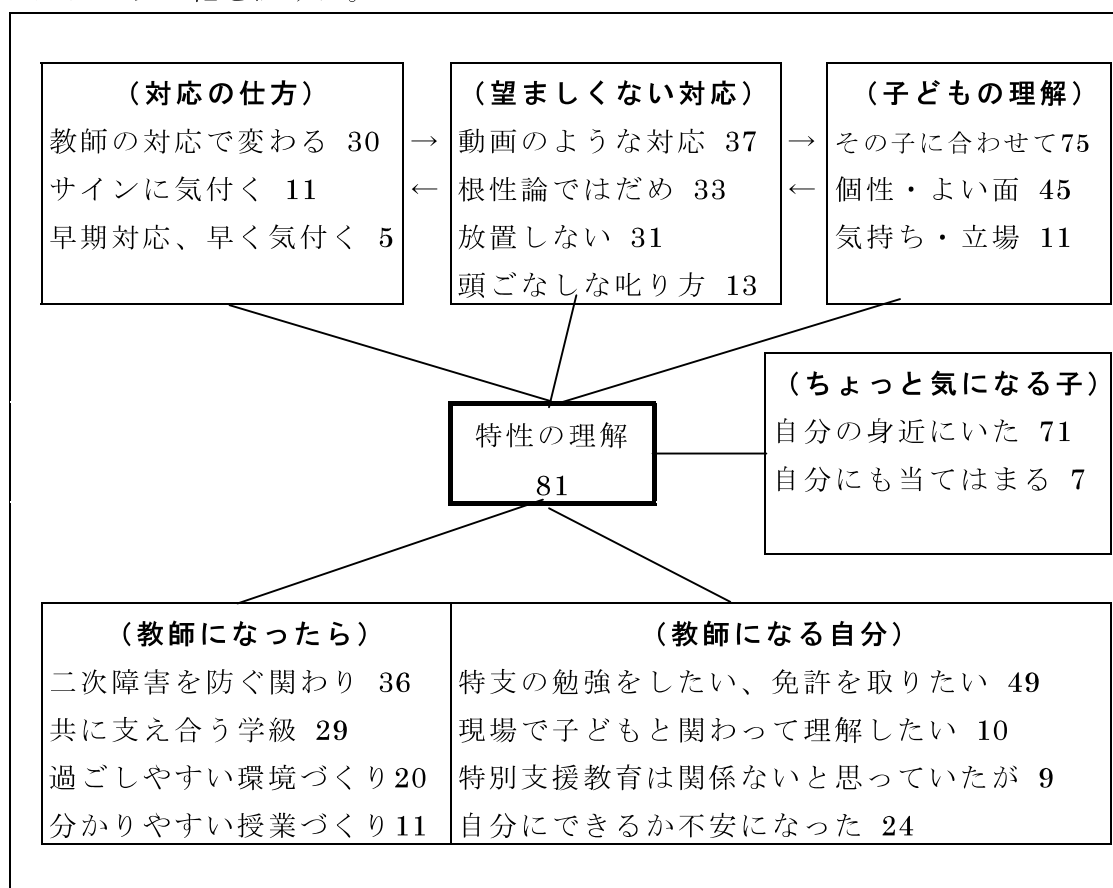


図1 整理・統合されたキーワードのカテゴリー化

### ① カテゴリー「特性の理解」

「特性の理解」は筆者が本講義の重要なキーワードの一つとしていたものであるが、感想内容の整理・統合では最上位に挙げられた。学生の印象に最も残り、かつ他のキーワードにも関連が深いことから、図では中央に位置付けた。

表 5－1 学生が記載した感想文（抜粋）

特性	障害の理解よりもどのような支援が必要なのか「特性の理解」が大切であるということが分かった。（小）
特性	特性に早く気付いて、その子の特性をうまく活かした対応をできる力を身につけたいと思う（小）
特性	特別支援教育というのは、特性のある子という視点を持ち、学びやすい工夫をし、うまくいかなければその子に合った方法を柔軟に変えていく教育ということを学んだ（中）

※コース別略称（小）：小学校（中）：中学校（幼）：幼稚園（特）：特別支援

## ② カテゴリー「子どもの理解」

子どもを理解する際の視点としてもっておきたいとする視点である。本カテゴリーは、「その子に合わせた支援」75名、「個性ととらえる・よい面を生かす」45名、「その子の気持ち・立場に立って理解する」11名であった。できないところばかりに着目するのではなく、得意なことを生かす、その子のやり方で支援するという点、肯定的な視点というところに気付いた学生もいた。

表 5－2 学生が記載した感想文（抜粋）

目線	「教師の目線」ではなく「その子の目線」で言い換えると「その子と同じ目線」で対処し、問題を解決することがポイントであると考えました。（小）
目線	障害のある子に対して、教師からのみの視点だけを持つのではなく、その子目線でその子の行動を見てどういうことをやろうとしているのか察する力、そしてそれに対する声かけや支援が求められていると強く感じました。（小）
その子	子供達とふれ合いながら、その子に合った接し方を模索できる教師を目指したいと考えました。（中）
良い面	その子どもの良い面をたくさん見つけ、子どもたちを肯定し存在価値に気づかせてあげることが教師の役目なのではないかと感じた。（特）
得意な点	障害を持った子の苦手な部分だけを見て判断するのではなく、他よりも得意な部分をより重視するべきだと思いました。なので子どもの得意なことを活かして、社会に出ていく上での強みをつくってあげられるような先生になりたいです。（中）

## ③ カテゴリー「教師の対応」

教師の対応について触れた感想は多数あったが、その中で、具体的な対応方法ではなく、対応次第では良い方向にも悪い方向にも行くというような内容、講義では直接触れなかったが「早期対応」という考え方が大事だとした感想をまとめた。「教師の対応で変わる」30名、「サインに気付く」11名「早期対応、早く気付く」5名であった。

表 5－3 学生が記載した感想文（抜粋）

対応	先生の発言1つで、子どもはストレスを感じたり逆に良い方向に向かうこともあるので、自分が教師になった時、発達障害の有無にかかわらず、子どものことを理解して言葉かけをするべきだと思いました。（小）
----	--

対応	先生が学校生活の中でその子に何も与えることができなかったならば、その子は学校生活を無駄にしたことになってしまいます。責任は本当に重いと思います。（特）
対応	障害のある子どもが学校を楽しい場だと思うには教師の力が大きいと思います。（幼）
早期	障害のある子どもの早期発見、そしてすぐに対策を考えて、障害のある子、ない子共に居心地の良い学級づくりを目指したいです。（中）
気付	子どもの気持ちを受け止めきれていない面もあるので、小さな変化にすぐに気付けるような教師になりたいと思った。（小）

#### ④ カテゴリー「望ましくない対応」

カテゴリー「望ましくない対応」では、気になる子どもの言動を題材にしたロールプレイの DVD 映像から、教師の対応の仕方にまで考えを巡らせる感想も見られた。「動画のような対応はよくない」37 名、「根性論ではだめだということが分かった」33 名、「見て見ぬふりをしない、放置しない」31 名、「頭ごなしな叱り方はしないようにしたい」13 名であった。

表 5－4 学生が記載した感想文（抜粋）

叱責	怒ったり、言葉で正しいことを表す事は簡単ではあるが、子どもたちが分かりやすいような方法を選択して指導することが大切だと感じた。（小）
叱責	LDやADHDなどの障害のあるこの特性に応じて（ニーズに合わせて）個別に対応していくことが特別支援の意味だと感じました。自分の固定観念だけで、その子を責めるようなことをしてはいけなかったと思いました。（中）
映像	講義中にあったDVDのような状況だと思わず自分の感情が先立って子供たちに対して強く当たってしまいそうな気がしました。しかしそれは間違っていて、きちんと教師として怒りをコントロールしなければならないのだと感じました。（中）
根性論	「がんばればできる子ども」という根性論は、私もかつてがんばってもできないことを押しつけられて苦しんだ経験があるので、それは自分自身がしないようにしたいと思います。（小）
放置	生徒に無関心であってもいけないし、放置と見守ることは違う。（小）

#### ⑤ カテゴリー「ちょっと気になる子ども」

学習上または生活上困難を示す子どもの例をイラストや動画により紹介したところ、発達凸凹や得意不得意は特別なことではなく、同級生や身近な人、あるいは自分等と重ね合わせている感想が多く見られた。「自分の身近にいたように思う」71 名「自分にも当てはまる場所がある」7 名であった。

表 5－5 学生が記載した感想文（抜粋）

身近	私が小学生の頃、極端に漢字が覚えられなかったり、小さい文字がうまく使えない子がいました。（小）
身近	私が小学生や中学生の頃にも、ビデオで見たようなクラスの中で「少し気になる」と言う友人がいました。（中）

身近	今日の講義を聞いて小学校の時に周りに行動面などで気になる人がいたなと思い出しました。（中）
自分	私自身も多動性障害ほどではないが、落ち着きがないことがあって、よく先生に叱られることがあった。（幼）
自分	人には得意不得意がどうしてもあると思います。私は2つのことを同時にするのが少し苦手で、特に「書く」と「聞く」を同時にするのが結構厳しいです。（中）

## ⑥ カテゴリー「教師になる自分」

文部科学省の調査では通常学級に在籍する児童生徒のうち 6.5%が発達障害の可能性のある子ども、クラスに1人か2人はいる、という解説を踏まえ、教師になるために、もっと特別支援教育について学びたい、子どもに直接関わることで実際の支援の仕方を学びたいというものである。特別支援教育の勉強をしたい・免許を取りたい 49 名、「もっと現場で子どもと関わって理解したい」10 名、「特別支援教育は関係ないと思っていたが、・・・」9 名、「特別支援教育は難しい、自分にできるか不安になった」24 名であった。

表 5－6 学生が記載した感想文（抜粋）

学習	特別支援教育というと何か難しいもののように思っていました、教育者を目指す立場として、必要な知識を得ていかななくてはいけないと思います。（幼）
副免	特別支援教育はとても難しいと思いましたが、副免で特別支援を取り、もっと勉強したいと思いました。（小）
現場	今は子どもとふれあって学ぶ機会が少ないので、今のうちから現場に出かけ子どもにふれあって理解し、大学生活 4 年間で特別支援教育について学びたいと思いました（幼）
概念	自分は中学校の先生になりたいと思っているので、正直、特別支援教育は関係ないと思っていた。しかし、今日の講義を聴いて、特別支援教育は教員になればみんながしていく必要があるということが分かりました。（中）
不安	発達障害の子と関わるのは大変だと言う意識を持ちがちで、私もそういう意識があったが、今日の講義を聞き発達障害は特性のある子と言う視点を持つようにすると接しやすく、大変と言う意識もなくなっていくと思った。（幼）

## ⑦ カテゴリー「教師になったら」

ここでは、自分が実際に教師になった時の指導・支援に言及しているものを集めた。「二次障害を防ぐ関わりをしたい」36 名、「共に支え合う学級づくりをしたい」29 名、「特性のある子どもも過ごしやすい環境づくりを考えたい」20 名、「分かりやすい授業づくりをしたい」11 名であった。

表 5－7 学生が記載した感想文（抜粋）

授業	学級内に「気になる子」がいても大丈夫なように掲示物や授業づくりなどにも気を配っていくべきだと思います。（小）
授業	その子どもの特性だと捉えて、どうしたらその子にとって分かりやすく楽しく授業ができるかということを考えたいと思いました。（小）
授業	先生が黒板に授業の逃れを書いていたのは、今日の授業の流れがこうになっていると安心して参加することを体験できたので、ちょっとした工夫を勉強したい。（特）



共生	障害を持った子と、健常な子との共存、共に生活していけるような環境づくりなどを考えていきたい。（小）
共生	障がいのある子も私たちが支えれば一緒に生きていけると思います。障がいがあるからと差別したり責めるのではなく、どうしたら一緒に生きていけるか考えるのが重要だと思いました。（特）
学級	子どもたち一人一人が輝き、それぞれに成長できるような学級をつくるために非常に学ぶことが多い講義だった。（小）
学級	学級経営をする上で、その子たちにも活躍の場を与えられたらいいなと思いました。（小）
学級	不器用な子どもたちもいるけれど、その子たちの中にある“素敵な部分”を周りにも紹介したいし、その子自身にも気づいてほしい。（小）
環境	今回の講義を通して、私が教育の場に立った時に、障害を持った子どもが楽しく過ごすことができるクラス環境作りをしていきたいです。（小）
理解	その子がどうしたらクラスになじめるか、何を頑張っているか、みんなで考えてあげる、つまり、周りの人全員がその子を手助けするということが根本にある重要なことだと思います。（中）
二次障害	必要以上に怒ったり責めたりすることは、その生徒の自信や意欲を低下させ、さらなる適用困難・不登校やひきこもりといった二次障害を引き起こさせる。もし教師に発達障害に対する十分な知識があればこの二次障害は防ぐことができるはずだ。（小）
二次障害	学校に行くことを嫌がって不登校になったり、他人に会うことを恐れひきこもりになったりする二次障害を引き起こす可能性があるため、私自身が実際に教員となり児童・生徒を指導する際には、このような二次障害の配慮も欠かさずにサポート、支援していけるようにしていこうと思いました。（中）

#### 4 考 察（感想の分析から見えてきたこと）

特別支援教育を初めて学習した学生の感想文の分析から、学生は、幼稚園小・中・高等学校に、学習上または生活上困難を抱えている児童生徒がいることを知り、教師を目指す立場で、「特性の理解が大切」という感想を単独のキーワードでは最も多く記していた(35.5%)。カテゴリー別に分析すると、その子の立場、その子の良い面、気持ちの理解を深めたいといった、「子ども理解」に関する感想を記したのは 57.5%であった。また、発達障害のある子どもへの教師として「望ましくない対応」について感想をもったのは 20.2%であった。

自分が教師になった時の学級づくりや授業づくりに言及していたものは 42.1%、教師になるにあたり、特別支援教育や子どもの理解を深めるために勉強したい、あるいは不安であることも含めて自分の今後の姿勢について言及した感想は、40.3%であった。ちょっと気になる子どもたちは自分の学校時代にもいた、あるいは自分にも苦手なところや、当てはまるところがあるというように身近な問題としてとらえる感想が 34.6%見られた。

「特別支援教育」への印象、あるいは今後の講義で詳細に触れられていく「発達障害」への印象として、入門編にあたる本講義では、学生は概ね、ポジティブ

な感想や、自分たちの課題として前向きな姿勢をもつことができたものと思われる。感想の中で「特別支援教育は難しいと思った、自分にできるかどうか不安になった」と記した学生が 24 名(10.5%)いたが、教育学部に入学したばかりで、知識や指導方法もまだ知らない立場であり、率直な感想であると思われる。逆に、「座学ばかりでなく、子どもと触れあう中で、困難を抱えている子どもの支援を学びたい」とする感想もあり、4 年間の学部教育の中で、講義・演習や教育実習も含め、特性のある子どもの理解や支援について、実地を含んだ実践的な内容を検討する必要がある。

また、DVD 映像や実際に使えるような教材や支援の例を用いたことで「ちょっと気になる子ども」「ちょっとした支援の工夫」について理解が促進されたことが読み取れる感想も見られた。このような教授方法は有効であると考えられる。

## 5 今後の課題

今回の分析は、教育学部 1 年生の「特別支援教育の考え方・進め方」1 コマ受講後の感想文に書かれたキーワードの整理・統合という方法を用いた。感想に書かれた自由記述が対象であり、そのキーワードを書かなかった学生が、その印象を持ったか持たなかったかを推し量ることはできない。また、記名式のレポートであるため、必ずしも率直な本音を書かなかったのではないかという面も否めない。今後の取組として、一定の内容を網羅した質問紙を用いるなどしたい。

また、教育学部の学生が、今後、特別支援教育を含め児童生徒理解や学級経営、学習指導等様々な講義を受講したり、附属学校の観察や実習、介護等体験実習等を経験する中で、特別支援教育や発達障害に関するイメージがどのように経年変化していくのかを検討していく必要もあると考える。今年度調査対象にした学生について、再度、特別支援教育に関する印象や自己課題等について調査し、比較検討したい。

## 6 文献等

- ・見上昌睦,猪狩恵美子,相澤宏充(2013),「教員養成課程初年次学生の特別支援教育に関する意識」,『日本教育大学協会研究年報』,31,27-39
- ・船橋篤彦(2014),「特別支援学校教員養成課程における実践的指導力の育成」,『障害者教育・福祉学研究』,10,33-40
- ・菊池哲平(2011),「教育学部学生における発達障害へのイメージ 接触経験・知識との関連」,『熊本大学教育実践研究』,28,56-73
- ・国立特別支援教育総合研究所 Web サイト「特別支援教育研修講座 基礎編」  
<http://www.nise.go.jp/cms/9,0,20.html> (2014.5.25 閲覧)
- ・京都教育大学(2014),「発達障害等に関する専門性向上ガイド 小学校 中学校」(DVD-ROM)
- ・杉山登志郎(2007),『発達障害の子どもたち』,講談社現代新書